

実験的な風景づくりからの都市計画

福本 優（兵庫県立人と自然の博物館 研究員）

はじめに

みなさんは、都市計画という言葉聞いて身近に感じますか？ きっとそのような人はほんの一握りで、多くの人にとって都市計画は「どこかのお役人が決めている自分とは縁のないこと」なのではないでしょうか。確かに少し前までは、都市計画は市民から縁遠い存在でした。しかし最近、市民によって生み出される都市の活動が、公の都市計画に影響を与える事例が生じています。本稿では、公の立場から取り組む実験的な風景づくりからの都市計画の事例について紹介したいと思います。

そもそも、都市計画って？ そして、その変化って？

さて、市民にとっての都市計画が、遠い存在から少しずつ近い存在に変わり始めていると述べました。そもそも「都市計画はどのように生まれたのか」を知ることで、身近になった理由を知ってもらえるのではないかと思います。

図1は、産業革命後のロンドンの様子です。奥に描かれた橋の上をモクモクと煙を立てて走る汽車の様子が、いかにも産業革命を象徴しているようです。目を下の方に移すと、たくさんのテラスハウス（長屋）が描かれています。今も残るロンドンらしい風景なのですが、その庭に注目してください。よく見ると、人がたくさんいませんか？ 産業革命が生み出したものはたくさんありますが、大量生産と流通も、その一つです。そして、この変化は従来までの働き方を変化させ、多くの労働者を生み出しました。地方で仕事のない人々は都市に労働者として流入し、図1にあるような過“密”な状態を生み出したのです。

過“密”になった都市は大きな問題に直面しました。感染症です。不衛生な水や空気により、過“密”に暮らす都市民の多くが病にかかってしまったのです。この状況を改善すべく、上下水道や住環境の改善を目指したのが、近代の都市計画の起こりなのです。それ以降、さらに産業が発展し都市が発達すると、煤煙や工業廃水による都市環境汚染やモータリゼーションなどによる交通問題等、都市が抱える問題も膨らみました。そうすると、人々が健康的な環境を求めて都市から離脱するため、郊外ベッドタウンが発展し、新たな乱開発の問題も生まれました。こうした都市の取り巻く環境の変化が背景

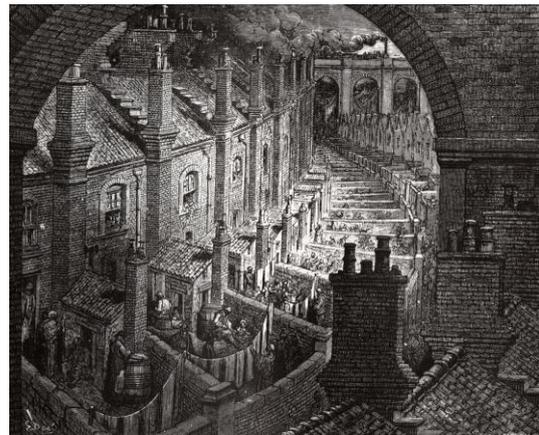


図1 産業革命後のロンドンの様子（出典：レオナルド・ベネーヴェロ著、訳）佐野敬彦、林寛治（1983）「図説 世界の都市史4 - 近代 - 」相模書房）

にあり、都市が大きく発展する拡大期での都市計画の最大の目的は「安全で衛生的な都市をつくる」ことだったのです。

しかし近年、日本をはじめ先進諸国は人類史上初めての課題に直面します。それが人口減少です。実は、大きなトレンドとして人口が減少するという事態は、今まで私たちは経験したことがないのです。それぞれが地続きの欧州諸国とは違い、日本では、その影響は特に大きな課題として昨今取り上げられています。人が増えることで消費が進み、発展する社会をベースにしていた都市の拡大期では、課題に対して更なる拡大により応えてきたわけですが、人が減り、消費の増加が見込めない社会をベースにした課題への解決策は、誰も持ち合わせていません。日本だけで考えれば、人口が減り、経済活動の縮退も予見される社会の中で、近代都市計画で既に大きく育った「安全で衛生的な都市」を「どう使いこなすか？」という、縮小期での都市計画の目的が生まれてきているのです。

放っておいても発展する都市の拡大期には、無秩序な発展を、行政が都市計画によって定めた開発基準等の制限を行うことで管理することができました。しかし、縮小期に既にある都市を使いこなすことは、行政にも経験がなく、我々住民が主体となって考えることが重要となります。図らずも、コロナ禍という感染症が私たちの暮らし方に再び変化をもたらしています。デジタル技術の進歩もその変化を助けてくれます。「行政がルールを決めて使う」から、「私たちが相談しながら使う」に都市計画も変化していく時代になっているのです。

今ある都市空間を使いこなす。～実験的な風景づくり～

「私たちが相談しながら使う」って、どうするの？ となりますよね。駅前でストリートライブしたり、オフィス街でキッチンカーを使ってカレー販売したり、「都市空間を使うなんて、めっちゃハードル高いねんけど」と、やはり自分とは関係ない話になってしまいがちです。しかし、例えば、あまり使われていない芝生広場で子供と遊ぶことや、芝生の端の小さな塀に腰かけてお茶することくらいなら、どうでしょうか？ こんな小さな使いこなすから、都市空間は変わっていきます。芝生広場にも管理者が存在します。「芝生維持のために広場の利用禁止」という張り紙を見かけたことがあるかもしれません。管理者は芝生の管理コストをできる限り下げるために利用を禁止しているわけですが、では何のために芝生広場があるのでしょうか。“庭園全体の美のため”なら利用禁止という管理も合点がいきますが、公園のような都市の憩いの空間であれば、利用禁止という管理は良くないかもしれません。適切な程度はありますが、多くの人が憩いのため、遊んだりお茶したりする使いこなしが実現するような、管理の仕方が求められると考えます。しかし、今まで続けてきた管理を変えることは難しく、利用者（＝市民）も禁止されているので使いたせない、管理者もニーズが見えていないので解放できない、という状況が生まれがちです。私は当博物館を使って、こうしたジレンマから一歩踏み出して、都市空間の利用や管理（マネジメント）を変化させるような取り組みを、試んでいます。

ルールはないけど、なんだか使いにくい芝生広場を使ってみる！

2017年に着任した時に気になっていた、あまり上手に使えていない芝生広場が、博物館にありました。博物館は、運用で利用禁止にしていなかったのですが、きれいに管理されているためか、歩道からよく見えるためか、芝生で遊ぶ人を見かけることはなかなかありませんでした。芝生広場は遊ぶ場・居る場とは認識されていませんでした。

そこで、2018年から実験的に『そとはく』とタイトルを付け、『パラソルとミニテント、カフェカウンターと少しの絵本を持って、芝生に立つ』という活動を始めました(図2)。芝生で遊ぶプログラムは展開せず、芝生を「居られる空間」に少しだけ変化させるという取り組みです。カウンターに私が立っているので、「何しているのですか？」と声を掛けられれば、「芝生でゆっくりしてください」と答える活動を続けていると、芝生広場にシートを敷いてお弁当を食べる家族や絵本を読みながら座る人が登場し始めました。誰かが利用し始めることで、芝生広場が遊ぶ場・居る場と認識され、次の利用者を誘引します。利用が継続していると、地域の子育て支援施設の方たちも芝生広場に来てくれるようになりました。赤ちゃんと日向ぼっこするお母さんも見かけるようになりました。まずは、実験的に利用しやすい風景を作り、利用している実態を積み重ねることで、場所のイメージを変化させることができた事例です。

現在、この利用の変化は博物館の新たな施設計画や、市の地域再生ビジョンにも影響を与えようとしています。利用ニーズが不明な状態での新たな計画づくりは、特に行政では難しく、公共空間の整備などでは大きなハードルとなります。しかし、実験的に風景を作ることで、私のような都市の専門家以外でも直観的に理解することができるようになります。多くの人の目に見える形で「こんな風景って素敵だ」と伝え、多くの人が都市空間を使いこなせるのだという実績が、これからの計画づくりの将来イメージとなり、基礎資料となっていくのです。

おわりに

私は公的施設の研究者として、また都市計画の専門家として、実験的な風景づくりを通して、地域の再生に取り組んでいます。そこには、一定の将来の都市イメージがあります。しかし、私のような専門家が持つイメージだけで都市が形作られていくわけではありません。都市計画は大きな変化の真っ只中にあります。誰か一人が考える都市計画から、市民一人ひとりが考える都市計画が求められる時代です。そして、その多様さが都市の魅力を生み出していくのです。自分本位ではなく、多くの人が他者を尊重しつつ主体的に利用す



図2 そとはくの様子
手前では自前のシートを広げ、風景に参加する人が登場している。

ることで、都市空間の価値が育まれていくのです。

コロナ禍の2020年からは、住まいの近くで過ごす時間も増えています。もう一度、自分が暮らす地域（＝都市）に目を向けてみる機会です。なんだか楽しくない都市を、暮らしていて楽しい都市に変えるチャンスは、意外と近くにあるものです。大きな都市像などを描く必要はありませんが、「こんなことができる街になったらいいのに」という思いをちょっと実践することが、これからの都市の姿を創り出していくことにつながるのです。